令和二年度

神奈川県公立高等学校入学者選抜学力検査問題

共通選抜　全日制の課程

Ⅱ　国　語

注　意　事　項

1　開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。

2　問題は **問五** まであり、1ページから14ページに印刷されています。

3　答えは、解答用紙の決められた欄に、記入またはマークしなさい。

4　数字や文字などを記述して解答する場合は、解答欄からはみ出さないように、はっきり書き入れなさい。

5　マークシート方式により解答する場合は、その番号の ◯ の中を塗りつぶしなさい。

6　解答用紙にマス目（例：□）がある場合は、句読点などもそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書きなさい。なお、行の最後のマス目には、文字と句読点などを一緒に置かず、句読点などは次の行の最初のマス目に書き入れなさい。

7　終了の合図があったら、すぐに解答をやめなさい。

受検番号
番

問一　次の問いに答えなさい。

(ア)　次の1～4の各文中の――線をつけた漢字の読み方を、ひらがなを使って現代仮名遣いで書きなさい。

1　彼女はとても勇敢だ。　　2　自転車で疾走する。

3　俊敏な身のこなしに感心する。　　4　服の綻びを丁寧に繕う。

(イ)　次のa～dの各文中の――線をつけたカタカナを漢字に表したとき、その漢字と同じ漢字を含むものを、あとの1～4の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

a　人材確保がキュウムとなっている。

1　カンキュウをつけて読む。　　2　キュウカをとって旅行する。

3　強いダキュウを捕る。　　4　セイキュウされた金額を確認する。

b　マイゾウされた宝を探す。

1　ドウゾウを建てる。　　2　カンゾウをいたわる。

3　内容をゾウホする。　　4　野菜をレイゾウする。

c　ダキョウを許さない。

1　ソッキョウで演奏する。　　2　新聞社がキョウサンしている。

3　キョウエイの選手をめざす。　　4　商品のキョウキュウが追いつかない。

d　目上の人をウヤマう。

1　具体的なセイサクを考える。　　2　望遠鏡でエイセイを観察する。

3　警察官がケイレイする。　　4　不可能と判断するのはソウケイだ。

(ウ)　次の**例文**中の――線をつけた「が」と同じ意味で用いられている「が」を含む文を、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

例文　新しい電子辞書が欲しい。

1　彼は足も速いが力も強い。　　2　友達を訪ねたが留守だった。

3　授業で我が国の歴史を学ぶ。　　4　先月公開された映画が見たい。

(エ)　次の短歌を説明したものとして最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

はなやかに轟(とどろ)くごとき夕焼(ゆうやけ)はしばらくすれば遠くなりたり　　佐藤(さとう)　佐太郎(さたろう)

1　空に赤色が広がるさまをひらがなで表し、夕暮れ時のもの悲しさを忘れて見入った姿を明示することで、静かな喜びを鮮明に描いている。

2　赤く染まった空の美しさを聴覚的に捉え、時間が経過して色あせたさまを自らとの距離として示すことによって、効果的に描いている。

3　街を染める夕焼を擬人的に表し、あっけなく夜が訪れたことへの孤独を暗示することで、あらがうことのできない自然を壮大に描いている。

4　激しい音が響く中で目にした夕焼を直喩で示し、赤色が薄れて闇に包まれた後の静けさと対比させることによって、感傷的に描いている。

問二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ある日、「盗人」は道で「僧」と出会い、祈りの力によって善人にしてほしいと頼んで別れた。その後、「盗人」と「僧」は再び出会った。

盗人、僧の袖を控へて（引きとめて）、怒つて申しけるは、「われ御辺（あなた）を頼むといへども、その甲斐なし。祈誓したまはずや。」と申しければ、僧答へて曰はく、「われその日より片時のいとまもなく、御辺のことをこそ祈り候へ（おっしゃるので）。」とのたまへば、盗人申しけるは、「おことは（あなた）出家の身として、[1]虚言をのたまふものかな。その日より悪念のみこそおこり候へ。」と申しければ、僧の謀に（はかりごと）、「にはかに喉渇きてせんかたなし（仕方がない）。」とのたまへば、盗人申しけるは、「これに井戸の侍るぞや。われ上より縄をつけて、その底へ入れ奉るべし（お入れしましょう）。飽くまで水飲みたまひて、上がりたく思しめし候はば、引き上げ奉らん。」と契約して、[2]件の井戸へ押し入れけり。かの僧、水を飲んで、「上げたまへ。」とのたまふとき、盗人力を出だしてえいやと引けども、いささかも上がらず（全く上がらない）。いかなればとて、さしうつぶして見れば、何しかは上がるべき（どうして上がるはずがあろうか）、かの僧、そばなる石にしがみつきておるほどに、盗人怒つて申しけるは、「さても御辺は愚かなる人かな。その儀にては、[3]いかが祈祷も験あるべきや。その石放したまへ。やすく引き上げ奉らん。」と言ふ。僧、盗人に申しけるは、「さればこそ、われ御辺の祈念をいたすも、このごとく候ふぞよ。いかに祈りをなすといへども、まづ御身の悪念の石を離れたまはず候ふほどに、御辺のごとく強き悪念は、善人になりがたふ候ふ。」と申されければ、盗人うちうなづゐて、かの僧を引き上げ奉り、足元にひれ臥して、「げにもかな（もっともなことであるなあ）。」とて、それより元結切り（髪を切って出家し）、すなはち僧の弟子となりて、やんごとなき善人とぞなりにけり。

（「伊曾保物語」から。）

(ア) ――線1「虚言をのたまふものかな。」とあるが、「盗人」がそのように言った理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「盗人」の悪念を消し去るために力を尽くしていると「僧」は言うものの、いまだに効果が表れていないから。

2 「盗人」の出家を手助けするために準備していると「僧」は主張するものの、少しも進展が見られないから。

3 改心しようと決めたときから「僧」に教わったように祈りをささげてきたが、悪念は消えることがないから。

4 善人になりたいと思ったときから「僧」に言われたとおり修行に励んできたが、全く心穏やかにならないから。

(イ) ――線2「件の井戸へ押し入れけり。」とあるが、「盗人」がそのようにした理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 水が飲みたいという「僧」の願いをかなえれば、悪念は消え去って善人になれると確信したから。

2 「僧」が祈りに専念していなかったことを隠そうとしたため、仕返しをしようと思いついたから。

3 出家したいという願いに耳を貸さず、自身の望みを優先する「僧」の身勝手さに腹が立ったから。

4 喉が渇いたという「僧」の言葉を聞いたので、満足するまで水を飲んでもらおうと思ったから。

(ウ) ――線3「いかが祈祷も験あるべきや。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 人を導く立場にもかかわらず、石に執着して修行をおろそかにするような愚かな「僧」の祈りには効果など期待できないということ。

2 自ら石にしがみついておきながら、引き上げてほしいと訴えるような愚かな「僧」の祈りには効果など期待できないということ。

3 重い石を離さずに、引き上げてくれないと文句ばかり口にするような愚かな「僧」の祈りには効果など期待できないということ。

4 水を全く飲むことなく、落ちている石に気をとられてばかりいるような愚かな「僧」の祈りには効果など期待できないということ。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「盗人」は、出家したいという訴えを一度は断られたが、困っていた「僧」の手助けをしたことが高く評価され、弟子になることが認められた。

2 「盗人」は、強い悪念ゆえに改心は難しいと皆から言われていたが、あきらめることなく「僧」が祈り続けたおかげで、善人になることができた。

3 「盗人」は、「僧」が持つ祈りの力ばかりをあてにしていたが、まず自身が悪念を捨てようとしなければならないと説かれ、すっかり心を改めた。

4 「盗人」は、「僧」が持つ祈りの力を信じられず心を閉ざしていたが、修行の大切さを懸命に伝えようとする熱意に心を動かされ、出家を決めた。

問三　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「三十次郎」は、オーストラリアへ行った兄「醤生」に代わり、一時期は経営が傾いていた「中島クリーニング」を引き継いだばかりである。父「洋二郎」の代から「中島クリーニング」を支えてきた染み抜き職人「長門（長さん）」と「三十次郎」は、連れだって中華街へ出かけ、飲食店に入った。

近くの円卓で家族連れが和やかに談笑している。小さな兄弟が皿にのった蟹炒めを覗き込んでは、指でつついている。弟が脂ぎったソースを服で拭うと、兄は止めるでもなく笑って同じことをしている。こらこら、そんなことをしたら染みになってしまうのに。ナプキンを使いなさい、ナプキンを。長門は他人事ながらそわそわとし、兄弟のやんちゃな指先を目で追った。両親は楽しげに喋っているだけで、子どもたちの素行には構いもしない。

醤生が弟を叱ったり、そんな真似はやめろと言うのも見たことがなかったな。長門はふいに思い出す。母の牧子も困った顔で言い聞かせはしたが、怒ったりしなかった。

洋二郎だけが怒鳴り声を散らし、三十次郎の首ねっこを猫の子みたいにひっつかみ、店からはじき出していた。クリーニング屋のせがれ(注)のくせに、と背中に荒い声を投げつけて。

洋二郎は、醤生の就職先のことを手放しで褒めていた。

「すげえな。総合商社ってところはクリーニングもあつかうのか。それも高度な無菌クリーニングだっつうんだから。よくわかんねぇけど、たいした仕事じゃねえか、なあ。」

だが三十次郎の製紙業に関しては「ふうん、紙屋でノートでもつくんのか。」と仏頂面で的外れな感想を口にしただけだ。

自分に関心のこもった視線などついぞ向けなかった父の跡を、兄の願いをかなえるためとはいえ、継ぐことになったのだ。三十次郎もさぞ戸惑っているのではなかろうか。

しかし目前で、デザートの胡麻団子と杏仁豆腐をどちらにするかさんざん迷っている男からは、不安も気概も伝わってこない。もしかして根っから楽天的な性格なのか。単に何も考えていないだけか。いずれにせよ心配になってくる。三十次郎もつられて家族連れに目をやっている。

「あーあ。あの子ら、あんなに染みつけちゃって。親父だったら雷おとすとこだよなぁ。」

さすがの三十次郎も、少しは気になるらしい。長門は心で大いにうなずく。

そうだ、染みというのはじゃまなものだ。そこにあるかぎり、抜かねばならんものなのだ。

「蟹は手で食うもんだ、と言いながらも、厳重にエプロンはつけさせるでしょうな。」

健啖家(注)だった洋二郎の豪快な食べ方を思い出し、長門もそこは同意した。

醤生とは洋二郎のこと、主に店の引継ぎに関しては仕事中にさまざまな言葉をかわしたものだ。だが三十次郎と洋二郎について語ることなど、いままでになかったなと気づく。

「じつは、これも兄貴から店のことを頼まれるときに聞いた話なんだけどね。親父が昔、おかしなこと言ってたらしいんだよ。」

三十次郎は、円卓ではしゃぐ兄弟に投げていた視線を長門のもとに戻した。

「またお袋のハンカチの話に戻るけどさ。簞笥の引き出しにたくさん入ってたハンカチを俺、一気にごっそり取り出して、いろんな色水で染める実験をしたことあったんだよね。」

一気にとは、ますます救いがたい。長門は嘆息し、運ばれてきた杏仁豆腐を啜った。

「それを兄貴に見つかって。兄貴、また律儀に全部染み抜きしようとして、親父に意気揚々と見せたらしいんだけどさ。親父、言ったんだって。一枚ぐらいそのままにしといてやれ。三十次郎ががんばって染めた、作品みてぇなもんだろって。」

「先代が、洋二郎さんが、そう言われたのですか？」

レンゲを持つ手をふいに止め、長門は訊ねた。三十次郎がうなずく。[1]その顔がその日初めて、まぶしい陽射しに困惑するみたいな不可思議な色に染まっている。

「あいつは店を継がせるには頼りねえが、なんか違うもんにでもなんだろ。楽しみに見ててやろうじゃねえか、とか。兄貴もうろ覚えらしいけどね、そんなふうなこと言ったって。」

「見てて、やろうと？」

長門の喉を、杏仁豆腐よりもあまくて滑らかなつめたさが、すうと流れ落ちる。

「それ聞いた母さんが、なんでだかとても嬉しそうな顔したらしいんだよ。そうよ、全部は洗わなくていいわって、染まったハンカチを一枚抜き取るもんだから、兄貴、すげえ悔しかったらしくてさ。『せっかく僕がぜんぶ綺麗にしてやるって言ってんのに！』って。それでよく覚えてるらしいんだ。兄貴もへんなとこ、記憶力いいからなぁ。」

[2]「そう、ですか。そんなことを言いましたか。」

「違うもんどころか、いまだなぁんもなってないけどね、俺。」

へらへら笑う三十次郎は、口にはしない。

父の言葉を伝え聞いたから、ためらっていた店を継ぐ気になったのだ、とは。いつでも言葉が足りないか、発された言葉もあさっての方角に飛んでいってしまう子だった。

「この杏仁豆腐、うまいよねぇ。お土産にもう一個たのもっかな。長さんもどう。」

だがそんなことをつぶやく三十次郎の目じりに、嬉しさが染みている。幼いころ好物だったところてんを盛大に啜ったときみたいに、透明な喜びを噛みしめる顔をしている。

あの夏。日陰の暗さにとりこまれそうだった遠いひと夏。長男だけをあからさまに贔屓していたような洋二郎も、まだ「家族」を見ていたのだ。背を向けては、いなかったのだ。牧子もまたそのことを知って、嬉しかったのだろうか。

まだ、この家は大丈夫だ。そんなほのかな希望を、胸に灯らせたのだろうか。

「どうかした？　長さん。」

レンゲを宙に浮かせたままでいる長門を、三十次郎が不思議そうな顔で覗き込む。

あのとき、中島クリーニングが崩れ落ちるのを食い止めたのは、ひょっとしてこの薄ぼんやりした男のつけた、ハンカチの染みだったのかもしれない。

[3]長門は泣きたいような笑いたいような気持ちを抑え、ゆっくり首を振った。

「いえ、あまさが歯にしみまして。」

「それにしても、まさかお袋までオーストラリアについていくとは思わなかったよなぁ。結局、残された次男より孫なんだよな。日本食に飢えてる日本人主婦たちを集めて、和食教室をやるなんて張り切ってるらしいけどさ。うまくいくのかなあ。ホームシックでこの(注)ハンカチで涙を拭く、なぁんてことにならなきゃいいけど。」

三十次郎が袋から出してみせたハンカチを、長門も見やる。

「そんなことにはならんでしょう。お強い方ですから。それより店長、言っておきますが、くれぐれもそ

のハンカチは白いままで送ってあげてくださいよ。」
「はは、わかってるって。もう色水遊びなんてする歳じゃないんだから。」
「どうだかわかりませんな。」
哀しくたたずむ母親の姿を縫い取るように映し出していたスワトウ(注)のハンカチ。
4 そこにいまは、レースに縁取られた家族の日々が透けて見える。その端に、遠巻きにたたずんで彼らを見守る自分の姿までもが、淡く縫いこまれている気がした。
長門はゆっくりまばたきをしてから、気を取り直すように咳払いした。
「三十次郎さん、いや店長。念のため、ひとつおうかがいしたいのですが……その、じゃましない染み云々というのは、いまも思っていることでしょうか。」
「うん、思ってるよ。そういう染みはさ、あえて綺麗に抜かなくたっていいんでないの。」
長門はさめたウーロン茶を噴きそうになりながら、亡き先代の言葉を心でたどる。
クリーニング屋の、店長とも、あろうべき者が。
「長さん食べないなら、この餃子、最後の一個もらってもいい？」
あ。長門がこたえるより先に、三十次郎がひとつだけ残っていた海老餃子にさっと箸を伸ばした。相手が食べないのを見届けてからおもむろに取ろうと、さっきから長門が虎視眈々とタイミングを狙っていた皿だ。そのとたん、だらりと下がっていた三十次郎の皺だらけのシャツの袖口が、小皿のラー油醤油に浸かった。
左の袖口と律儀に対になるように、右の袖口にも赤茶の染みが広がる。長門は慌ててておしぼりの端をコップの水に浸す。その手を伸ばしたところで「いいよいいよ。」と制された。
「でも唐辛子と油が入っていますから。軽く処理をしておけば、あとで落ちやすくなります。」
「いいのいいの。これはじゃましない染みだから。」
「なんと？」
「長さんと中華街で飯食ったっていう、記念の染みだからさ。」
三十次郎は首をすくめてみせると、最後の一個の餃子を旨そうに咀嚼する。むろん、もう片方の袖についている醤油染みのことなど、はなから気づいてもおらぬようだ。
前途多難、という言葉が長門の胸に落ち、曖昧な輪郭の染みとなった。
帰り際、中国語のネオンがにぎやかに光る通りを先刻くぐりぬけた門を目指し歩いた。横を歩く三十次郎は満足げに、肉まんや腸詰の土産で膨らんだ袋をゆらしている。その袖についた「長門と中華街で飯を食った記念」なる染みも、いまや薄い闇にまぎれている。
だが染みがそこにあるかぎり、抜かねばならない。長門の気持ちも、宵闇に漂う。
頼りなさそうに見えても、やはりあなたの息子ですな。妙なところが頑なだ。5 まぁ、染みのついたシャツの一枚ぐらいは、私も残しておくとしますか。
いまは何を問うこともできなくなった遠い姿を思い浮かべ、長門は声もなく語りかけた。
（野中　ともそ「洗濯屋三十次郎」から。一部表記を改めたところがある。）

（注）せがれ＝息子のこと。
健啖家＝大食いの人のこと。
このハンカチ＝「三十次郎」は、「牧子」が好んでいた、中国の都市スワトウで作られたレース地のハンカチを飲食店に入る前に見つけ、プレゼントするために購入している。
スワトウ＝中国の都市。レースや刺繍（ししゅう）が有名である。

(ア) ――線1「その顔がその日初めて、まぶしい陽射しに困惑するみたいな不可思議な色に染まっている。」とあるが、そのときの「三十次郎」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　跡継ぎとして頼りにするような言葉を「洋二郎」が残していたと「醤生」から聞いたことを思い出し、誇らしく思うものの応えられていないことを歯がゆく思っている。
2　ハンカチを色水で染めた作品を褒める言葉を「洋二郎」が残していたと「醤生」から聞いたことを思い起こし、喜びを覚えるものの店長としては未熟な自分を恥じている。
3　自分の将来を楽しみにしているというような言葉を「洋二郎」が残していたと「醤生」から聞いたことを思い起こし、改めて嬉しく思うとともに照れくさくも感じている。
4　家族を和ませるための実験を喜ぶ言葉を「洋二郎」が残していたと「醤生」から聞いたことを思い出し、戻らない過去を寂しく感じるとともになつかしさも覚えている。

(イ) ――線2「そう、ですか。そんなことを言いましたか。」とあるが、ここでの「長門」の気持ちをふまえて、この部分を朗読するとき、どのように読むのがよいか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　「洋二郎」が「三十次郎」のことも気にかけていたとわかって驚くとともに、新たに知った「洋二郎」の一面を心に描いて感慨にふけっていることがわかるように、ゆっくりと噛みしめながら読む。
2　「洋二郎」が「三十次郎」の無責任さを黙認していたと知って落胆するとともに、以前から抱いていた「三十次郎」への不信感をあらわにしていることが伝わるように、厳しく責める口調で読む。
3　「洋二郎」がハンカチを染めた「三十次郎」のことを許していたと知り、染み抜き職人として「洋二郎」に裏切られたと気づいた怒りを抑えていることがわかるように、声を押し殺しながら読む。
4　「洋二郎」は「三十次郎」を怒鳴りつけてばかりいたが、跡継ぎとして「三十次郎」に期待するがゆえの行動であったことに気づいて納得していることが伝わるように、明るく朗らかな調子で読む。

(ウ) ――線3「長門は泣きたいような笑いたいような気持ちを抑え、ゆっくり首を振った。」とあるが、そのときの「長門」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　「三十次郎」の話に聞き入っていた自分に気づき、人の心をつかむのが上手な「三十次郎」を見直したものの、気持ちを素直に伝えることは腹立たしく思えてごまかそうとしている。
2　頼りなく見える「三十次郎」に「中島クリーニング」が救われたのではないかと思ったものの、こみ上げてくる思いを伝えることはせず、自分の胸にとどめておこうとしている。
3　楽天的な性格の「三十次郎」に「牧子」まで希望を持っていたことが許せず、染み抜き職人として尽力してきた過去の自分が愚かに感じられ、うそであってほしいと思っている。
4　「三十次郎」のつけた染みが「中島クリーニング」のためには不可欠だったと理解はしたが、染みは抜くべきものだという信念が揺らいだことを、すぐには受け入れられずにいる。

(エ) ――線4「そこにいまは、レースに縁取られた家族の日々が透けて見える。」とあるが、そのときの「長門」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 スワトウのハンカチを見て、家族のことに思い悩む「牧子」の姿が想起されたが、それぞれを思いやる気持ちで家族はつながっていたとわかり、温かい思い出も確かにあったのだと認識を改めている。

2 スワトウのハンカチを見て、家族の危機にも気丈に振る舞う「牧子」の姿が想起されたが、思いも寄らなかった家族それぞれの哀しみを知り、本当の気持ちを見ようとしていなかったと痛感している。

3 スワトウのハンカチを見て、家族のことに絶望する「牧子」の姿が想起されたが、一つの目標に向かって互いに励まし合ってきた家族の歩みを知り、強いきずなに気づいていなかったと実感している。

4 スワトウのハンカチを見て、家族の危機にも希望を抱き続ける「牧子」の姿が想起されたが、惜しみない努力で家族は結ばれていたとわかり、人知れず涙にくれる日々もあったのだと考え直している。

(オ) ――線5「まぁ、染みのついたシャツの一枚ぐらいは、私も残しておくとしますか。」とあるが、そのときの「長門」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 染みに対する独特な考え方は受け入れられないが、頑固な「洋二郎」と相反する柔軟さには魅力を感じ、前途多難かもしれないが自分も「三十次郎」とともに成長していこうと心に決めている。

2 染みに対する「三十次郎」の考え方には感激したものの、経験不足からくる店長としての未熟さは無視することができず、いまは亡き「洋二郎」の代わりに自分が育てていきたいと感じている。

3 染みに対する考え方に共感はできないものの、信念を持っているところには「洋二郎」と通じるものを感じ、「三十次郎」に寄り添いながらこれからも見守っていこうと思いを新たにしている。

4 染みに対する考えを押し付けてくる「三十次郎」に腹は立つが、世話になった「洋二郎」の息子である以上は意見することもできず、あきらめて支えていくしかないと自分に言い聞かせている。

(カ) この文章について述べたものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「洋二郎」との心温まる思い出を「長門」と分かち合ったことで、自覚していなかった魅力に「三十次郎」が気づいていくさまを、染みに関する話や多くの比喩を用いて生き生きと描いている。

2 優秀な職人である「長門」と関わる中で、「洋二郎」に叱られてばかりだった「三十次郎」が店長として大きく成長していくさまを、兄との対比や家族の思い出を交えて感動的に描いている。

3 「洋二郎」とは異なる奔放な振る舞いに隠れた信念に触れたことで、頑固な「長門」が「三十次郎」に深くのめり込むさまを、家族の過去やさまざまな料理の描写を用いて鮮やかに描いている。

4 これまで知り得なかった「洋二郎」の話を聞く中で、「長門」が気づいていなかった「三十次郎」の姿が浮かびあがってくるさまを、回想やハンカチにまつわる話を通して印象的に描いている。

問四　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

玉石混交の科学的知見と称されるものの中でも、現実をよく説明する「適応度の高い仮説」は長い時間の中で批判に耐え、その有用性や再現性故に、後世に残っていくことになる。そして、その仮説の適応度をさらに上げる修正仮説が提出されるサイクルが繰り返される。[1]それはまるで生態系における生物の「適者生存」のようである。ある意味、科学は「生きて」おり、生物のように変化を生み出し、より適応していたものが生き残り、どんどん成長・進化していく。それが最大の長所である。現在の姿が、いかに素晴らしくとも、そこからまったく変化しないものに発展はない。教条主義(注)に陥らない〝可塑性〟こそが科学の生命線である。

しかし、このことは「科学が教えるところは、すべて修正される可能性がある」ということを論理的必然性をもって導くことになる。科学の進化し成長するという素晴らしい性質は、その中の何物も「不動の真理」ではない、ということに論理的に帰結してしまうのだ。科学の知見が常に不完全ということは、ある意味、[2]科学という体系が持つ構造的な宿命であり、絶え間ない修正により、少しずつより強靱(きょうじん)で真実の法則に近い仮説ができ上がってくるが、それでもそれらは決して一〇〇％の正しさを保証しない。

より正確に言えば、もし一〇〇％正しいところまで修正されていたとしても、それを完全な一〇〇％、つまり科学として「それで終わり」と判定するようなプロセス(注)が体系の中に用意されていない。どんなに正しく見えることでも、それをさらに修正するための努力は、科学の世界では決して否定されない。だから科学的知見には、「正しい」「正しくない」という二つのものがあるのではなく、その仮説がどれくらい確からしいのかという確度の問題が存在するだけなのである。

では、我々はそのような「原理的に不完全な」科学的知見をどう捉えて、どのように使っていけば良いのだろうか？　一体、何が信じるに足るもので、何を頼りに行動すれば良いのだろう？　優等生的な回答をするなら、[3]より正確な判断のために、対象となる科学的知見の確からしさに対して、正しい認識を持つべきだ、ということになるのだろう。

「科学的な知見」という大雑把なくくりの中には、それが成熟した分野のものか、まだ成長過程にあるような分野なのか、あるいはどんな手法で調べられたものなのかなどによって、確度が大きく異なったものが混在している。ほぼ例外なく現実を説明できる非常に確度の高い法則のようなものから、その事象を説明する多くの仮説のうちの一つに過ぎないような確度の低いものまで、幅広く存在している。それらの確からしさを正確に把握して峻別(注)していけば、少なくともより良い判断ができるはずである。

しかし、非専門家でも理解しやすい情報が、どんな科学的知見に対しても公開されている訳ではもちろんないし、科学的な情報の確度というものを単純に調査規模や分析方法といった画一的な視点で判断して良いのか、ということにも、実際は深刻な議論がある。一つの問題に対して専門家の間でも意見が分かれることは非常に多く、そのような問題を非専門家が完全に理解し、それらを統合して専門家たちを上回る判断をすることは、現実的には相当に困難なことである。

▼こういった科学的知見の確度の判定という現実的な困難さに忍び寄って来るのが、いわゆる権威主義である。たとえばノーベル賞を取ったから、『ネイチャー』(注)に載った業績だから、といった[4]権威の高さと情報の確度を同一視して判断するというやり方だ。この手法の利点は、なんと言っても分かりやすいことで、現在の社会で「科学的な根拠」の確からしさを判断する方法として採用されているのは、この権威主義に基づいたものが主であると言わざるを得ないだろう。

A　こういった権威ある賞に選ばれたり、権威ある雑誌に論文が掲載されるためには、多くの専門家の厳しい審査があり、それに耐えてきた知見はそうでないものより強靱さを持っている傾向が一般的

に認められることは、間違いのないことである。また、科学に限らず、専門家は非専門家よりもその対象をよく知っている。だから、何事に関しても専門家の意見は参考にすべきである。それも間違いない。多少の不具合はあったとしても、どんな指標も万能ではないし、権威主義による判断も分かりやすくある程度、役に立つなら、それで十分だという考え方もあろうかと思う。

B、この権威主義による言説の確度の判定という手法には、どこか拭い難い危うさが感じられる。それは人の心が持つ弱さと言えばいいのか、人の心理というシステムが持つ弱点と関連した危うさである。端的に言えば、人は権威にすがりつき安心してしまいたい、そんな心理をどこかに持っているのではないかと思うのだ。拠りどころのない「分からない」という不安定な状態でいるよりは、とりあえず何かを信じて、その不安から逃れてしまいたいという指向性が、心のどこかに潜んでいる。権威主義は、そこに忍び込む。

そして行き過ぎた権威主義は、科学そのものを社会において特別な位置に置くことになる。倒錯した権威主義の最たるものが、科学に従事している研究者の言うことなら正しい、というような誤解であり、また逆に科学に従事する者たちが、非専門家からの批判は無知に由来するものとして、専門用語や科学論文の引用を披露することで、高圧的かつ一方的に封じ込めてしまうようなことも、よく見られる現象である。科学の知見は決して一〇〇％の真実ではないにもかかわらず、である。

「権威が言っているから正しい」というのは、本質的に妄信的な考え方であり、いかに美辞を弄しようと、とどのつまりは何かにしがみついているだけなのだ。▲

また、もう一つ指摘しておかなければならないことは、5権威主義が〝科学の生命力〟を蝕む性質を持っていることだ。権威は人々の信頼から成り立っており、一度間違えるとそれは失墜し、地に落ちてしまう。この失墜への恐怖感が〝硬直したもの〟を生む。「権威は間違えられない」のだ。また、権威主義者に見られる典型的な特徴が、それを構築する体系から逸脱するものを頑なに認めない、という姿勢である。それは権威主義が本質的に人々の不安に応えるために存在しているという要素があるからであり、権威主義者はその世界観が瓦解(注)し、その体系の中にある自分が信じた価値が崩壊する恐怖に耐えられないのである。

現代の民主主義国家では、権威主義による強権的な異論の封じ込めはもう起こらないと信じたいが、特定の分野において「権威ある研究者」の間違った学説が、その人が存命の間はまかり通っているというようなことは、今もしばしば見られるようには思う。権威主義に陥ってしまえば、科学の可塑性、その生命力が毒されてしまうことは、その意味で、今も昔も変わらない。科学が「生きた」ものであるためには、その中の何物も「不動の真実」ではなく、それが修正され変わり得る可塑性を持たなければならない。権威主義はそれを蝕んでしまう。

そして、何より妄信的な権威主義と、自らの理性でこの世界の姿を解き明かそうとする科学は、その精神性において実はまったく正反対のものである。科学を支える理性主義の根底にあるのは、物事を先入観なくあるがままに見て、自らの理性でその意味や仕組みを考えることである。それは何かに頼って安易に「正解」を得ることとは、根本的に真逆の行為だ。

だから、科学には伽藍(注)ではなく、バザール(注)が似合う。権威ではなく、個々の自由な営為の集合体なのだ。〝科学的に生きる〟ことにとっては、〝信頼に足る情報を集め、真摯に考える〟、そのことが唯一大切なことではないかと思う。その考えが正しいか間違っているかは、厳密に言えば答えのない問いのようなものである。それが真摯な営みである限り、様々な個性を持った個々人の指向のまま、生物の遺伝子変異のように、6ランダムな方向を持ったものの集合体で良いのだ。

そういった様々な方向で進む人々の中から、より適したやり方・仮説が生き残り、次の世界を担ってい

く。それが生きている「科学」の姿であり、職業的科学者だけでなく、すべての人がその生き様を通して参加できる〝人類の営み〟ではないかと思うのである。

（中屋敷均「科学と非科学」から。一部表記を改めたところがある。）

（注）教条主義＝ある特定の原理や原則に基づいて物事を説明しようとする応用のきかない考え方。
プロセス＝手順。方法。　峻別＝厳しく区別すること。
ネイチャー＝学術雑誌のうちの一つ。　瓦解＝壊れること。
伽藍＝寺の建物の総称。　バザール＝市場のこと。

(ア) 本文中の［A］・［B］に入れる語の組み合わせとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　A　もちろん　B　しかし　2　A　なぜなら　B　そこで
3　A　たとえば　B　もし　4　A　ところで　B　だから

(イ) ――線1「それはまるで生態系における生物の『適者生存』のようである。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　科学的知見が評価される際に、科学者が他の仮説を批判することで自説の価値を高めてきたさまは、環境に適さないものを犠牲に繁栄する生物のあり方と似ているということ。
2　ある科学的知見が人々の需要に合わせて修正される中で、他の仮説を排除して不動のものへと進化してきたことは、強い生物だけが生き延びていくさまと似ているということ。
3　様々な科学的知見が選別される過程において、残った仮説がさらに良いものへと進化してきたことは、より環境に順応した生物が生き残っていくさまと似ているということ。
4　多くの科学的知見が存在する中で、科学者が互いの学説を参考にし合って適応度を上げてきたさまは、互いの特長が影響し合って進化する生物のあり方と似ているということ。

(ウ) ――線2「科学という体系が持つ構造的な宿命」とあるが、その内容を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　科学の価値は時代によって変動するため、永遠に有用性を維持することはできないという宿命。
2　科学は変化を前提とするものであるため、絶対的に正しい科学的知見は存在し得ないという宿命。
3　科学の価値は進化し続ける点にあるため、科学者も成長し続ける努力を強いられるという宿命。
4　科学は学説の公平性を最優先するため、科学者は科学的知見の修正から逃れられないという宿命。

(エ) ――線3「より正確な判断のために、対象となる科学的知見の確からしさに対して、正しい認識を持つべきだ」とあるが、そのことについて筆者はどのように述べているか。それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　様々な科学的知見の確度の違いを見極めていくことが必要となるが、情報の収集や確度の判定には課題も多くあり、専門家でない人々が高度な判断をすることには難しさが伴う。
2　科学的知見についての完全な情報が公開されていないことに加え、専門家と非専門家が同じ条件下で議論をかわすことは無意味なため、確度を正しく認識することは現実的ではない。
3　現在残っている科学的知見は確度の高いものばかりだが、情報公開の程度や調査規模を判断する方法には問題もあり、非専門家が分析して行動の指針とすることには危険が伴う。
4　科学的知見の質や研究手法に対して疑義を唱える専門家がいることに加え、どの分野も画一的な視点によって調査されているため、確度を正確に判別することは専門家でも困難だ。

(オ) ――線4「権威の高さと情報の確度を同一視して判断するというやり方」とあるが、そのことについて筆者はどのように述べているか。それを説明した次の文中の［Ⅰ］・［Ⅱ］に入れる語句として最も適するものを、本文中の▼から▲までの中から、［Ⅰ］については**六字**で、［Ⅱ］については**七字**でそれぞれ抜き出し、そのまま書きなさい。

> 権威の高さと情報の確度を同一視する手法は、［Ⅰ］という利点はあるが、行き過ぎてしまえば何かにすがりたいという心理と結びつき、権威あるものは正しいというような［Ⅱ］に陥りかねない。

(カ) ――線5「権威主義が〝科学の生命力〟を蝕む」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 権威主義者は、人々の不安を解消して信頼を勝ち取ることを重視し、揺るぎない真実を世間に広めるという科学の目的を軽視してしまうから。
2 権威主義者は、自分の支持する学説が他の学説より優位であることを示すため、科学の特徴である一貫性を無視して次々と仮説を修正するから。
3 権威主義者は、正しさよりも世間の関心を集める話題性を優先するため、真実を追究して変化するという科学の長所を消し去ってしまうから。
4 権威主義者は、権威を失うことや自分の信じた価値が崩れることを恐れ、科学の本質である修正や変化を受け入れられず現状に固執するから。

(キ) ――線6「ランダムな方向を持ったものの集合体で良い」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 科学で重要なことは、ある学説を先入観なく理解しようとするひたむきな姿勢であり、専門家でない人々が思考したものにこそ意味があるから。
2 科学を支えているのは、過去に提唱された学説に基づいて判断しようとする誠実な態度であり、正しいかどうかを追究することは必要ではないから。
3 科学で大切なのは、ある学説が信頼に足るものかどうかを深い知識を用いて証明することであり、専門家による思考の集積にこそ価値があるから。
4 科学において必要なことは、様々な考えを持つ人々が自ら情報を集めて思考を深化させることであり、一つに集約することは重要ではないから。

(ク) 本文について説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 様々な個性を持つ研究者の中から次代を担う科学者が現れている意義を、生物の遺伝子変異の過程と重ねて説明した上で、「科学」の伝統は守るべきだと論じている。
2 世界の姿を解明するために変化し続けていく科学のあり方を、権威主義との関係にも触れながら説明した上で、誰もが「科学」に携わることができると論じている。
3 自ら情報を集めて真摯に考える職業的科学者の重要性を、「科学」の歴史を根拠に説明した上で、あらゆる分野において専門家の意見に従うのが良いと論じている。
4 再現性の高さ故に信頼を得てきた科学の姿を、人間の心理が持つ弱点と関連付けながら説明した上で、すべての人が「科学」に寄与しなければならないと論じている。

問五　中学生のAさん、Bさん、Cさん、Dさんの四人のグループは、「総合的な学習の時間」で水の使用量について調べ、話し合いをしている。次の**グラフ**、**表1**、**表2**と文章は、そのときのものである。これらについてあとの問いに答えなさい。

Aさん　私たちは水の使用量について、様々なことを調べてきましたね。近年、家庭用水を含む生活用水の使用量は減少傾向にあり、一人が一日あたりに使用する量も減っているそうです。

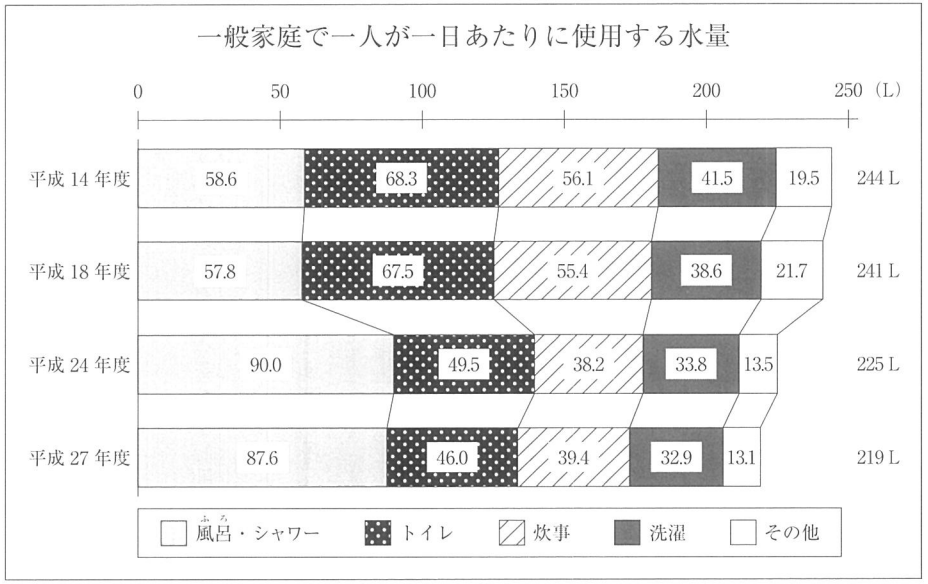
Bさん　ここで**グラフ**を見てください。一般家庭において、一人が一日あたりに使用している水量を目的別に分け、年ごとに示したものです。これを見ると［　　］ことがわかります。

Cさん　なるほど。他には、一人が一日あたりに使用する家庭用水の使用量全体が減っていることもわかりますね。

Dさん　水の使用量の変動には、気候や生活スタイルの変化などの影響もあると思いますが、なぜ家庭用水の使用量は減ったのでしょうか。

Cさん　それを考えるために、**表1**を見てみましょう。便器で使用する一回あたりの水量を発売年ごとにまとめたものです。ここからは大き

グラフ



東京都水道局「一般家庭水使用目的別実態調査」より作成。

表1

便器の一回あたりの洗浄水量（L）

発売年＼機能	大	小	eco 小
昭和 51 年	13.0		
平成 5 年	8.0	6.0	
平成 18 年	6.0	5.0	4.5
平成 19 年	5.5	4.5	4.0
平成 21 年	4.8	4.0	3.8
平成 24 年	3.8	3.3	3.0
平成 29 年	3.8	3.3	3.0

一般社団法人日本レストルーム工業会「各社節水便器の変遷」より作成。
表1内の「eco 小」はごく少量の水を流す場合に使用する機能をさす。

表2

水の使い方

調査年＼	豊富に使っている		節水している		特に気にしていない・その他
	節水は考えず豊富に使う	節水は必要だが豊富に使う	ある程度節水している	まめに節水している	
昭和 61 年	12.3％	27.3％	41.5％	9.7％	9.2％
平成 6 年	9.5％	25.4％	50.8％	9.1％	5.1％
平成 11 年	6.0％	21.7％	50.3％	13.9％	8.3％
平成 13 年	5.1％	24.5％	54.2％	10.7％	5.4％
平成 20 年	4.0％	21.8％	58.3％	14.0％	1.8％

内閣府「『節水に関する特別世論調査』の概要」より作成。

な変化が読み取れますね。使用者が用途ごとに水量を切り替えられる機能も開発されており、公共施設でもそのような機能が搭載された節水便器を見かけることが多くなってきました。

Bさん　便器以外の水利用機器で言えば、風呂水（ふろみず）をくみ上げる機能がついた洗濯機も販売されています。また、手で洗うときの十分の一程度の水量で洗える食器洗い乾燥機もあるそうです。

Aさん　便器や洗濯機などの水利用機器は進歩してきたのですね。新しい技術は私たちの生活を快適にしてくれるだけでなく、限りある資源を有効に使うことにも役立ちそうです。

Dさん　では、これからも新しい水利用機器の開発が進んでいけばよいということですね。

Bさん　本当にそれだけでよいのでしょうか。**表2**を見てください。普段の生活でどのような水の使い方をしているか調査した結果を、年ごとにまとめたものです。「節水している」と答えた人は、昭和六十一年では五十パーセント程度でしたが、平成二十年では七十パーセントを超えています。

Cさん　平成二十年の調査で「豊富に使っている」と答えた人の中にも、節水は必要だと考えている人は全体の二十パーセント程度いますから、実践しているかどうかは個人差があるものの、九十パーセントを超える人が節水の必要性を認識していると言えますね。

Dさん　一方、「節水は考えず豊富に使う」と答えた人は、昭和六十一年では十二・三パーセントでしたが、平成二十年では四・〇パーセントとかなり低い割合になっています。節水に対する意識がこれほど変化しているとは知りませんでした。

Aさん　これまでの話を総合すると、**表1**と**表2**から読み取った内容から、家庭用水の使用量が減った主な理由は、［　　］からだと考えられます。

Dさん　そうですね。本日の話し合いをきっかけに、改めて限りある水を大切に使っていきたいと思いました。

(ア)　本文中の［　　］に入れるものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　平成27年度の家庭用水の使用量の中で、「風呂・シャワー」の使用量は、「トイレ」の使用量の半分以下になっている

2　平成27年度の家庭用水の使用量の中で、「洗濯」の使用量は、「風呂・シャワー」の使用量の三分の一以下になっている

3　平成27年度は平成14年度と比べて、「トイレ」の使用量は三割程度減少しており、「洗濯」の使用量は二割程度減少している

4　平成27年度は平成14年度と比べて、家庭用水の使用量全体に占める「炊事」の使用量の割合が、三分の一以下に減少している

(イ)　本文中の［　　］に適する「Aさん」のことばを、次の①～④の条件を満たして書きなさい。

①　書き出しの［家庭用水の使用量が減った主な理由は、］という語句に続けて書き、文末の［からだと考えられます。］という語句につながる**一文**となるように書くこと。

②　書き出しと文末の語句の間の文字数が**二十五字以上三十五字以内**となるように書くこと。

③　**表1**と**表2**から読み取った具体的な内容に触れていること。

④　「技術」「意識」という二つの語句を、どちらもそのまま用いること。

（問題は、これで終わりです。）

Ⅱ 国語 解答用紙

（令和二年度）

氏名

受検番号						
0	0	0		0	0	0
1	1	1	1	1	1	1
2	2	2	2	2	2	2
3	3	3		3	3	3
4	4	4		4	4	4
5	5	5		5	5	5
6	6	6		6	6	6
7	7	7		7	7	7
8	8	8		8	8	8
9	9	9		9	9	9

受検番号は左から書くこと。

問一

(ア) 1	(ア) 2	(ア) 3	(ア) 4	(イ) a	(イ) b	(イ) c	(イ) d	(ウ)	(エ)
＊解答欄は裏面にあります。	＊解答欄は裏面にあります。	＊解答欄は裏面にあります。	＊解答欄は裏面にあります。	①	①	①	①	①	①
				②	②	②	②	②	②
				③	③	③	③	③	③
				④	④	④	④	④	④

各二点

問二

(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
①	①	①	①
②	②	②	②
③	③	③	③
④	④	④	④

各四点

問三

(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)	(オ)	(カ)
①	①	①	①	①	①
②	②	②	②	②	②
③	③	③	③	③	③
④	④	④	④	④	④

各四点

問四

(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)	(オ)	(カ)	(キ)	(ク)
①	①	①	①	＊解答欄は裏面にあります。	①	①	①
②	②	②	②		②	②	②
③	③	③	③		③	③	③
④	④	④	④		④	④	④

(ア)は二点、(オ)は両方できて四点、他は各四点

問五

(ア)	(イ)
①	＊解答欄は裏面にあります。
②	
③	
④	

(ア)は四点、(イ)は六点

注意事項

1　ＨＢまたはＢの鉛筆(シャープペンシルも可)を使用して，◯の中を塗りつぶすこと。
2　答えを直すときは，きれいに消して，消しくずを残さないこと。
3　数字や文字などを記述して解答する場合は，解答欄からはみ出さないように，はっきり書き入れること。
4　解答用紙を汚したり，折り曲げたりしないこと。

良い例	悪い例		
●	線	小さい	はみ出し
	丸囲み	レ点	うすい

氏名

問一

(ア)

1

2

3

4

(び)

問四

(オ)

Ⅰ

Ⅱ

問五

(イ)

家庭用水の使用量が減った主な理由は、

からだと考えられます。

35

25

受検番号

Ⅱ 国語

正答表並びに採点上の注意

（令和二年度）

問一

(エ)	(ウ)	(イ) d	(イ) c	(イ) b	(イ) a	(ア) 4	(ア) 3	(ア) 2	(ア) 1
2	4	3	2	4	1	ほころ（び）	しゅんびん	しっそう	ゆうかん
2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点

問二

(エ)	(ウ)	(イ)	(ア)
3	2	4	1
4点	4点	4点	4点

問三

(カ)	(オ)	(エ)	(ウ)	(イ)	(ア)
4	3	1	2	1	3
4点	4点	4点	4点	4点	4点

問四

(ク)	(キ)	(カ)	(オ) Ⅱ	(オ) Ⅰ	(エ)	(ウ)	(イ)	(ア)
2	4	4	妄信的な考え方	分かりやすい	1	2	3	1
4点	4点	4点	両方できて4点		4点	4点	4点	2点

問五

(イ)	(ア)
家庭用水の使用量が減った主な理由は、節水便器などの技術が進歩するとともに、人々の節水に対する意識も高まったからだと考えられます。	3
6点	4点

(イ)は正答例。

採点上の注意

【問題全般について】

○ 中間点は、**問五**(イ)以外には設けないこと。

○ 疑問点は複数の採点者及び点検者によって判断し、校内で統一すること。

○ 誤字・脱字（句読点に係る誤りを含む）の判断については、校内で統一すること。

【抜き出し問題について】

○ 完全正答とする。誤字・脱字については減点対象とはせず、誤答とする。

【中間点のある記述問題について】

○ 正答例以外であっても、与えられた条件をすべて満たし、問題の趣旨に即した文ならば、正答として六点を与える。

○ 内容については、中間点を設けないこと。

○ 誤字・脱字（句読点に係る誤りを含む）については、その数にかかわらず二点減点とする。

○ 表現に問題があり、それによって明らかに問題の趣旨から外れている、内容を読みとることができない等の場合は、誤答とする。ただし、許容できると判断した場合は、その数にかかわらず二点減点とする。表現の問題については、複数の採点者及び点検者によって判断し、校内で統一すること。

○ 中間点は、誤字・脱字（句読点に係る誤りを含む）がある場合と表現に問題がある場合の減点以外は設けないこと。したがって、中間点は四点または二点となる。

○ 指定語句がある場合、その語句が含まれていない解答は誤答とする。また、指定語句がそのまま書かれていない場合（漢字表記をひらがな表記にしたもの等）や指定語句の誤り（誤字・脱字）についても誤答とする。

○ **問五**(イ)について

・ 指定語句は「**技術**」と「**意識**」である。

得点項目A　内容については、次の二点に触れていること。

(あ)「節水便器などの技術が進歩した」こと。

(い)「人々の節水に対する意識が高まった」こと。

〈正答例〉

家庭用水の使用量が減った主な理由は、
人々の節水しようという**意識**が高まり、節水型トイレ
からだと考えられます。

家庭用水の使用量が減った主な理由は、
節水便器などの**技術**が発達し、節水を**意識**していない
からだと考えられます。

家庭用水の使用量が減った主な理由は、
水利用機器の**技術**が進歩したことに加え、人々の節水
からだと考えられます。

などの**技術**も開発された

人が減った

意識も向上した